

# 『感情教育』における記憶のエクリチュール

木内 堯

## はじめに

フランス・ロマン主義の作家たちは、過去の記憶がふとした偶然から不意に蘇る瞬間を、しばしば描いてきた。ルソーは『告白』第六巻の冒頭で、ツルニチソウを目にしたとき、ヴァランス夫人と過ごした約三十年前の幸福な日々の記憶が蘇ったと語っている。また、シャトーブリアンは『墓の彼方からの回想』第二巻の末尾で、ツグミのさえずりを耳にして、少年時代を過ごしたコンブールの風景が突如として眼前に広がったと述べている。あるいは、ミュッセは『世紀児の告白』で、放蕩な生活を送る主人公がリュクサンブール公園の小径を目にして子供の頃のことを想い出す場面を描いている。この他にも、ネルヴァルの短編「シルヴィ」やボードレールの詩「香り」など、ロマン主義の潮流に連なる数多くの作品に、ブルーストが「無意志的記憶」と名付けたような、偶然の体験によって呼び起こされる記憶が、描かれている。「無意志的記憶」は、フランス・ロマン主義文学のトポスのひとつであると言うことができるだろう<sup>1</sup>。

フローベールの小説『感情教育』においても、過去の記憶が不意に呼び覚まされる瞬間がたびたび描かれている。主人公フレデリックが「アルバニア娘の兄」と題する恋歌を聞いて、アルヌー夫人と初めて出会った日を想い出す場面は、その典型的な例だろう<sup>2</sup>。ただし、『感情教育』では、無意志的に

---

<sup>1</sup> ブルーストは『見出された時』の一節で、「無意志的記憶」の体験を描いた先駆者として、シャトーブリアン、ネルヴァル、ボードレールの三人の名前を挙げている。また、ブリュノ・ヴィアールはロマン主義のキーワードのひとつとして「無意志的記憶」を取り上げている。Voir Bruno Viard, *Les 100 mots du romantisme*, Presses Universitaires de France, « Que sais-je ? », 2010, p. 82-83. なお、ブルースト以前のフランス文学における「無意志的記憶」の主題については、ジャン＝フランソワ・ペランの論文を参照。Jean-François Perrin, « La scène de réminiscence avant Proust », *Poétique*, n° 102, 1995.

<sup>2</sup> 「歌の文句はフレデリックに、船の外輪覆いの間でぼろをまとった男が歌っていた歌を想い出させた。彼の目は無意識に、自分の前に広げられていたドレスの裾に引き寄せられていた。節が終わるごとに、長い休止があった。—— 木立を抜ける風のそよぎは波の音に似ていた。」(Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, édition présentée et annotée par Pierre-Marc de Biasi, Librairie Générale Française, « Le Livre de Poche classique », 2002, p. 140.)

呼び起こされた記憶は、漠としたものに留まるか、あるいはすぐに消え去ってしまう。この小説では、記憶の湧出が、物語の新たな展開を促したり、主人公に何かしらの啓示をもたらしたりすることはない。むしろ、記憶の儚さ、壊れやすさが、フローベールの小説の基調を成している。

本論では、『感情教育』において無意志的な記憶の想起がどのように描かれているのかを、詳しく分析してみたい。呼び起こされた記憶が明確な形を取る場合ではなく、記憶が不明瞭にしか描かれていない場合に、特に注目してみたいと思う。そのようなケースのほうが、フローベールの小説に特有なものであると考えられるからだ。具体的には、光の記憶、赤の記憶、夕暮れの記憶という、三つの感覚的な記憶に焦点を当てて、これらの感覚的記憶が繰り返し浮上する様子を物語の展開に沿ってそれぞれ見ていきたい。そのような作業を通じて、『感情教育』における記憶のメカニズムの一端を解明することが、本論の目的である。

## 1. 光の記憶

最初に、『感情教育』における光のイメージについて論じてみたい。小説冒頭、船の上で、フレデリックがアルヌー夫人に初めて出会う場面は、光のイメージに彩られている。フレデリックは、彼女の姿を初めて目にした瞬間、その瞳から発する光に眩惑され、そして日の光に照らされた肌の輝きに魅了される。もっとも、小説の出会いの場面において光が描かれるということ自体は、決して珍しいことではない。たとえば、ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』において、主人公が美しい女騎士と邂逅する場面で、彼女を包み込む超自然的な光を描いているし、バルザックも『毬打つ猫の店』において、画家テオドールが商人の娘オーギュスティヌを見初める場面で、彼女に優しく降り注ぐランプの光を描いている。また、フローベール自身、若書きの自伝的作品『十一月』において、主人公が娼婦マリーと初めて会う場面で、カーテン越しに彼女を照らす日の光を描写している。『感情教育』に独特なのは、ヒロインを照らす光が、出会いの場面だけではなく、その後も繰り返し描かれていることだ。

ここでは、光のイメージの反復が、フレデリックに記憶の想起を促していることを、明らかにしたい。そのためにまずは、出会いの場面で光がどのように描かれているのかを、確認しておこう。小説冒頭、フレデリックがアルヌー夫人の姿を初めて目にする瞬間は、次のように描かれている。

それは幻のようであった。

彼女はベンチの真ん中に、たったひとりで腰掛けていた。少なくとも、彼女の瞳に眩惑させられて、他に誰も見分けることができなかった<sup>3</sup>。

「それは幻のようであった」という言い回しが、マクシム・デュ・カンの旅行記『ナイル河』から借用したものであることは、よく知られている<sup>4</sup>。デュ・カンはこの言い回しを、エジプトの娼婦クシウク・ハーネムとの出会いを描いた一節で用いている。

階段の上で、クシウク・ハーネムは私を待っていた。頭を上げて彼女を見た。それは幻のようであった。彼女は落日の光に包まれて、立っていた […] <sup>5</sup>。

もちろん、フローベールは、デュ・カンが用いた言い回しを単に書き写しているわけではない。フローベールはこの一節で、フレデリックの「眩惑」を視覚的に表現するために、タイポグラフィーの規則を故意に逸脱している。フランス語の原文では、「それは幻のようであった」の一文はドゥ・ポワンで終わり、その後には空白だけが残されている。ピエール・コニーも指摘しているように<sup>6</sup>、この空白は、フレデリックが受けた衝撃を表わしている。

この後、フレデリックは、川面に浮かぶボートを眺める振りをしながら、アルヌー夫人のことを観察する。そのとき、日の光に照らされた肌の輝きに、魅了される。

今までに、このような小麦色の肌の輝き、体つきの魅惑、光の透きとおる指の繊細さを、彼は目にしたことがなかった<sup>7</sup>。

フローベールはこの一節で、やや特異な文体を採用している。つまり、「光り輝く小麦色の肌」と書く代わりに、「小麦色の肌の輝き」と書いているの

---

<sup>3</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 46-47. 原文も参考までに引用しておく。

« Ce fut comme une apparition :

Elle était assise, au milieu du banc, toute seule ; ou du moins il ne distingua personne, dans l'éblouissement que lui envoyèrent ses yeux. »

<sup>4</sup> Voir Jean Pommier et Claude Digeon, « Du nouveau sur Flaubert et son œuvre », *Mercur de France*, 1<sup>er</sup> mai 1952, p. 54, n. 29.

<sup>5</sup> Maxime Du Camp, *Le Nil*, présenté par Michel Dewachter et Daniel Oster, préface de Jean Leclant, Sand ; Conti, 1987, p. 130.

<sup>6</sup> Pierre Cogny, *L'Éducation sentimentale de Flaubert. Le monde en creux*, Larousse, « Thèmes et textes », 1975, p. 19.

<sup>7</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 47.

である。このような言い回しは、主人公の受けた印象を忠実に表現したものであると言える。なぜなら、フレデリックを魅惑するのは、肌そのものというよりも、「輝き」というその性質であるからだ<sup>8</sup>。

このように、小説冒頭の出会いの場面は、光のイメージに彩られている。つづいて、光がその後どのように描かれているのかを、見ていくことにしよう。アルヌー夫人を照らす光がこの次に描かれるのは、フレデリックが彼女の家を訪ねる場面である。

彼女は最初の日と同じ姿勢をして、子供のシャツを縫っていた。小さな男の子が、その足下で、木製の動物の玩具で遊んでいた。マルトは、少し遠くで、習字をしていた。

[…]

部屋は落ち着いた雰囲気だった。美しい日の光が窓ガラスから差し込み、家具の角が光っていた。アルヌー夫人は窓際に腰掛けていたので、光の束が、うなじの巻き毛を照らし、金色の流れに広がって琥珀色の肌に染みとおっていた<sup>9</sup>。

「最初の日」とは、二人が初めて出会った日のことだ。フレデリックがアルヌー夫人の姿を初めて目にしたとき、彼女は船の上で刺繍をしていた（「彼女は何かを刺繍しているところだった<sup>10</sup>」）。フレデリックは部屋で縫い物をしているアルヌー夫人を見て、船上での出会いを思い出しているのである。

また、この数日前にも、フレデリックはアルヌー夫人の家を訪れているのだが、その場面では部屋の暗さが強調されていた（「たんすの縁に置かれたランプの笠が住まいを暗くしていた<sup>11</sup>」）。暗がりの部屋にいるアルヌー夫人を見て、フレデリックは冷淡な気持ちを抱く。それに対し、今回の訪問では、明るい部屋にいるアルヌー夫人を見て、「いまだかつてない強い愛情<sup>12</sup>」にとらえられる。フレデリックの恋心に再び火がつくのは、光に照らされたアルヌー夫人の姿が、船上での出会いの光景を想起させているからだろう。

---

<sup>8</sup> このような文体的特徴については、ジル・フィリップの分析を参照。Gilles Philippe, « La langue littéraire, le phénomène et la pensée », in *La Langue littéraire. Une histoire de la prose en France de Gustave Flaubert à Claude Simon*, sous la direction de Gilles Philippe et Julien Piat, Fayard, 2009, p. 98-100.

<sup>9</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 222.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 47.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 187.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 222.

実際、小説の筋書きでは、この場面に関して、「過去の印象が戻ってくる<sup>13)</sup>」とフローベールは書き記している。決定稿では、過去の印象が回帰しているのかどうか、明確には語られていない。しかし、前回の訪問では、過去との「相違」がフレデリックに幻滅をもたらしていたのに対し（彼が冷めた気持ちでいるのは、アルヌー夫人を以前と同じ環境に見出すことができなかつたためと説明されている）、今回の訪問では、過去との「類似」が消えかけていた恋情を呼び覚ましていることは、たしかである。

小説の他の箇所でも、フレデリックがアルヌー夫人への情熱を取り戻すときに、光が描かれている。アルヌー夫人のことはもうあきらめようと心に決めた矢先、フレデリックは街角で彼女とばったり出くわす。そのとき、陽光に包まれたアルヌー夫人の姿に、つい恍惚となってしまう。

日の光が彼女を包み込んでいた。—— その卵形の顔立ち、長い眉、肩の線にびったりと沿った黒いレースのショール、玉虫色の絹のドレス、帽子の縁につけたスマレの花束、すべてが途方もなく燦然と輝いているように彼の目には映った。限らない優しさがその美しい瞳から溢れ出していた […] <sup>14)</sup>

この一節でティレが用いられていることに、まず注目しておきたい。小説冒頭の出会いの場面では、ドゥ・ポワンのあとの空白が、アルヌー夫人を前にしたフレデリックの「眩惑」を表現していたが、この場面では、ティレが彼の恍惚感を表している。いずれの場面でも、フローベールはタイポグラフィによって、フレデリックが受ける衝撃を視覚的に表現しているのである。

また、この数ヶ月前、パリ郊外の陶器工場で、フレデリックがアルヌー夫人に会ったときは、彼女は闇に包まれており（「端正な横顔が闇の中に青白く浮かび上がっていた<sup>15)</sup>」）、その闇の存在が二人を隔てる距離を際立たせていた（「目の前のドレスは、暗闇と一体となって、途方もなく、限りのない、持ち上げることのできないものに見えた<sup>16)</sup>」）。それに対し、この場面では、日の光に包まれたアルヌー夫人を見て、フレデリックはうっとりとし、別れた後も、この偶然の出会いがもたらした甘美な喜びを噛み締めている。彼がこのように甘美な思いに浸るのは、船上の出会いの光景を無意識のうちに想い出しているからだと考えることができるだろう。

---

<sup>13)</sup> NAF 17611, f°20 (*L'Éducation sentimentale. Les Scénarios*, édition préparée par Tony Williams, José Corti, 1992, p. 138).

<sup>14)</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 388.

<sup>15)</sup> *Ibid.*, p. 308.

<sup>16)</sup> *Ibid.*, p. 309.

以上のように、小説中の二つの場面において、フレデリックは光に照らされたアルヌー夫人を見て、再び恋に落ちている。光は、単にアルヌー夫人を魅惑的に見せるだけでなく、二人が初めて出会った日の光景を想起させることによって、消えかけていたフレデリックの恋心を再び掻き立てているのだと考えられる。もっとも、光に照らされたアルヌー夫人を見てフレデリックが出会ったときの光景を想い出しているのかどうか、はっきりと語られているわけではない。しかし、いずれの場面でも、過去と現在の感覚の類似によって、フレデリックの感情が高まっていることは、間違いないだろう。

光の記憶の分析を締め括るにあたって、『ボヴァリー夫人』における光のイメージについて、簡単に触れておきたい。というのは、『ボヴァリー夫人』においても、ヒロインを照らす光が繰り返し描かれているからだ。この小説で、エンマは、シャルル、レオン、ロドルフの三人の視点から描写されているが、誰の視点から描写されるときにも、光は欠かさずに描かれている。エンマも、アルヌー夫人と同じく、光のイメージに彩られたヒロインであると言えるだろう。しかし、『感情教育』における光の描写と『ボヴァリー夫人』における光の描写は、いくつかの点で異なっている。

まず、『フローベールの小説における感覚と事物』においてピエール・ダンジェも指摘しているように<sup>17</sup>、『感情教育』では、光はアルヌー夫人の肌に浸透するのに対し、『ボヴァリー夫人』では、光はエンマの肌の表面を撫でるだけである。ここでは、レオンの視点からエンマが描かれる一節を、例として取り上げておこう。パリに旅立つレオンをエンマが見送る場面である。

彼女は、顎を引き額を前に傾けて、顔を背けた。光が、大理石の上をすべるように、彼女の額の上を眉の曲線まですべっていったが、エンマが地平線に何を見ているのか、心の底で何を考えているのかは、わからなかった<sup>18</sup>。

エンマの肌の表面をなぞる光は、彼女の思考の内部へは入っていけないということを、象徴的に示しているかのようだ。ここでは光の描写は、エンマとレオンの間に横たわる距離を強調している。

また、『感情教育』では、光に照らされたアルヌー夫人の姿を見るのは常にフレデリックであるのに対し、『ボヴァリー夫人』では、視点となる人物

---

<sup>17</sup> Pierre Danger, *Sensations et objets dans le roman de Flaubert*, Armand Colin, 1973, p. 143.

<sup>18</sup> Flaubert, *Madame Bovary*, texte établi, présenté et annoté par Jeanne Bem, dans *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Claudine Gothot-Mersch, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 2013, p. 255.

が毎回異なる。そのため、光のイメージの反復が登場人物の記憶の作用に影響を及ぼすことはない。三人の男は、他の男も自分と同じように、光に照らされたエンマの姿を眺めているということを、けっして知ることはないのである。

## 2. 赤の記憶

次に、『感情教育』における赤のイメージに目を向けてみよう<sup>19</sup>。フローベールの小説において、色彩は重要な役割を担っている。たとえば、『ボヴァリー夫人』は青を基調とする作品であると言える。まず、シャルルが真夜中に受け取る往診依頼の手紙は青い蠟で封印されている（この往診がエンマとの出会いのきっかけとなる）。また、エンマは、シャルルと初めて会う日は青いメリノウールの服を、レオンと初めて顔を合わせるときは青い絹のスカートを、それぞれ身につけている。さらに言えば、エンマは青色の瓶に入った砒素を飲んで、自殺する。この他にも、さまざまな青のイメージが、エンマの周囲には周到に配置されている<sup>20</sup>。

『感情教育』の基調となる色は、赤である。この小説で、アルヌー夫人は、赤もしくはそれに近い色のものを身につけていることが多い。たとえば、フレデリックの前に初めて姿を現すときは、ばら色のリボンのついた麦わら帽子をかぶっているし、彼のもとを最後に訪れるときは、ざくろ色の財布を手にはしている。エンマが青のイメージに囲まれたヒロインであるのに対し、アルヌー夫人は赤のイメージに彩られたヒロインであると言えることができるだろう。しかし、『ボヴァリー夫人』における青のイメージと『感情教育』における赤のイメージとは、小説内における役割が大きく異なる。『ボヴァリー夫人』では、青のイメージは単に繰り返し現れるだけで、登場人物の記憶の作用とは無縁である<sup>21</sup>。それに対し、『感情教育』では、赤のイメージは主人公の記憶と密接に関わっている。

---

<sup>19</sup> フィクション全般における「赤」については、蓮實重彦『「赤」の誘惑 フィクション論序説』（新潮社、2007年）を参照。なお、この著作では、フローベールにおける「赤」については特に触れられていない。

<sup>20</sup> 『ボヴァリー夫人』における青のイメージについては、ジャック・ネーフの論考を参照。Jacques Neefs, «“Le bleu du ciel l’envahissait...” (Proust, Flaubert)», in *La Couleur réfléchie*, sous la direction de Michel Costantini, Jacques Le Rider et François Soulages, L’Harmattan, « Arts 8 », 2000. なお、この点は、蓮實重彦の『「ボヴァリー夫人」論』（筑摩書房、2014年）でも簡潔に触れられている（III章註（2）を参照）。

<sup>21</sup> 砒素の入った青色の瓶に関しては、その例外であると言えるかもしれない。エンマ

ここでは、赤のイメージがフレデリックの記憶の作用にどのような影響を及ぼしているのかを、明らかにしたい。そのためにまずは、船の上の出会いの場面において、赤のイメージがどのように描かれているのかを、確認するところから始めよう。この場面で赤のイメージは二度にわたって描かれている。まず、すでに述べたように、フレデリックがアルヌー夫人の姿を初めて目にするとき、彼女はばら色のリボンのついた麦わら帽子をかぶっている。

彼女は大きな麦わら帽子をかぶっていて、そのばら色のリボンが彼女の後ろに風ではためいていた。左右に分けた黒い髪は長い眉の先をかすめて、ずっと下まで垂れ下がり、その顔の卵形を愛らしく抱きしめているかのようにであった。明るい水玉模様のモスリンのドレスは、無数の折り目となって広がっていた<sup>22</sup>。

フレデリックの視線が帽子からドレスの裾へと下降運動を描いていることに、ひとまず注意しておきたい。次に、船から降りた後、フレデリックが船上の光景を回想する場面で、天幕の「小さな赤い房飾り」が描かれている。

[...] ドレスの端の裾飾りからは、栗色の絹の細い靴を履いた足がのぞいていた。亜麻布の天幕が彼女の頭上に大きな天蓋を成して、縁の小さな赤い房飾りがそよ風に揺れていた、いつまでも<sup>23</sup>。

ここでフレデリックが回想しているのは、アルヌー夫人を目にした最初の瞬間ではなく、それよりも少し後で、彼女が天幕の下で本を読んでいる姿を見たときのことである（「しかしフレデリックはすぐに天幕の下へ引き返した。そこにはアルヌー夫人が戻ってきていた。彼女は灰色の表紙の薄い本を読んでいた<sup>24</sup>」）。アルヌー夫人の姿を最初に目にしたときとは反対に、ここではフレデリックの視線は、足から頭上の天幕へと上昇運動を描いている。興味深いのは、どちらの描写でも、赤いものが風に揺れていることだ。「赤」と「風」の組み合わせは、その後、フレデリックが『漁師の子、シルヴィオ』と題する小説の創作を試みる場面でも現れる。

『漁師の子、シルヴィオ』と題する小説を書き始めた。舞台はヴェネツィア。主人公は彼自身、ヒロインはアルヌー夫人。彼女はアントニアという名だ。

---

が砒素を飲もうとしてその瓶をすぐに見つけることができたのは、瓶が青色であることを記憶していたからだ、と考えられるからである。

<sup>22</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 47.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 53.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 51.



——彼女をものにするため、彼は何人もの貴族を殺し、街の一部を焼き払い、彼女の家のバルコニーの下で歌うのだったが、そのバルコニーではモンマルトル大通りの赤いダマスク織のカーテンがそよ風にはためいているのだった。あまりにも多くの過去の記憶が知らず知らずのうちに反映されていることに気づき、意気消沈した。それ以上書き進めることはせず、無為はいつそう堪え難いものになった<sup>25</sup>。

モンマルトル大通りには、アルヌーの営む「産業芸術」が店を構えており、フレデリックはこの時点ではまだ、その店の二階にアルヌー夫人が住んでいると思いついでいる（実際には別の通りに住んでいることを後に知ることになる）。「産業芸術」の二階のカーテンが実際に何色なのかはわからない。しかし、フレデリックが風にはためく赤いカーテンを自らの小説の中で描いているのは、アルヌー夫人と初めて会った日に目にした、風に揺れる赤のイメージを、無意識のうちに想い出しているからに違いない。というのも、フレデリックが創作を放棄するのは、あまりにも多くの過去の記憶が知らず知らずのうちに投影されていたことに気づいたためであると、説明されているからである。

船上の出会いから一年以上経った後、フレデリックがようやくアルヌー夫人と再会を果たすときにも、彼女は赤いものを身につけている。フレデリックがアルヌー夫人の家に初めて招かれる場面である。

彼女は闇に包まれていたので、最初、彼は頭しか見分けられなかった。彼女は黒のピロードのドレスを着ていて、髪には赤い絹のアルジェリア風の長い巾着が、櫛に巻きついて、左肩の上に垂れ下がっていた<sup>26</sup>。

最初の出会いとは対照的に、アルヌー夫人は闇に包まれた格好でフレデリックの前に姿を現す。しかし、赤いものを身につけている点では、前回と変わらない。

アルヌー夫人が髪に赤い飾りをつけているのは、この場面だけではない。六月暴動の後にダンブルーズ邸で催された晩餐会では、彼女は「フクシアの枝」を髪につけている。

---

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 74.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 102.

彼女は黒いバレージュ織のドレスに金の腕輪をつけていて、初めて彼が彼女の家で食事をした日のように、髪には何か赤いもの、フクシアの枝が巻き髪についていた<sup>27</sup>。

フレデリックは「フクシアの枝」を見て、アルヌー夫人の家に初めて招かれた日のことを想い出している。フレデリックがアルヌー夫人の家に初めて招かれたのは、1841年から1842年にかけての冬のことであるから、彼はここで六年以上前の出来事を想起していることになる。

また、下書きの段階では、この一節の後に、「彼女を欲しいと思う気持ちはかつて抱いた欲望によってさらに強いものになった<sup>28</sup>」とフローベールは書き記していた。決定稿では、この一文は削除されている。しかし、過去の記憶によって現在の欲望が刺激されていることに、変わりはないだろう。この直後、フレデリックはアルヌー夫人に対して、彼女を恋い慕う気持ちを唐突に吐露し始めるのだから。

以上のように、赤のイメージは、二つの異なるやり方で、フレデリックの記憶の作用に影響を及ぼしている。まず、フレデリックは、アルヌー夫人をモデルとする小説の執筆を試みる際、赤のイメージを無意識のうちに想起している。また、彼女の髪につけられた「フクシアの枝」を目にした折には、以前にも似たような赤い髪飾りをつけていたことを不意に想い出している。このように、『感情教育』において、赤のイメージは単に繰り返し現れるだけではなく、主人公の記憶の作用と密接な関係にある。

赤の記憶の分析を終えるにあたって、フローベールの他のテキストにも、赤のイメージに彩られた女性がしばしば登場するという事実を、参考までに指摘しておきたい。まず、初期の自伝的作品では、主人公の恋愛対象となる女性は必ず赤いものを身につけている。『狂人の手記』では、マリアの赤いコートが、主人公が彼女と出会うきっかけとなる。浜辺で波にさらわれそうになっていた赤いコートを主人公が拾い上げ、そのことを後でマリアから感謝されるのである<sup>29</sup>。『十一月』では、主人公がマリーと初めて会うとき、彼女は赤い珊瑚の粒がほどこされた櫛をつけている。また、フローベールは旅行手帖の中で、東方旅行の帰りにローマを訪れた際、見知らぬ女性に一目惚れし、狂おしいまでの欲望を抱いたというエピソードを語っているが、そ

---

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 508.

<sup>28</sup> NAF 17608, f°33v°.

<sup>29</sup> ちなみに、『感情教育』の冒頭でフレデリックがアルヌー夫人のショールを拾い上げる場面は、『狂人の手記』のこのエピソードを書き直したものである。

の女性は、赤いブラウスを着て、肩まで垂れ下がる大きな赤いリボンを髪に巻きつけていたという。フローベールは赤のイメージに心底魅了された作家であったと言えるだろう。

### 3. 夕暮れの記憶

最後に、『感情教育』における夕暮れのイメージに注目してみたい。ある冬の夕暮れ、フレデリックはアルヌー夫人の家を訪れた際、買い物に出掛ける彼女に付き添って、二人でパリの街路を歩く機会を得る。彼はこの出来事を、後に繰り返して想起することになる。ここではまず、この夕暮れの場面がどのように描かれているのかを確認した上で、この場面がその後どのように想い出され、そして忘れ去られていくのかを、小説の時間軸を随時参照しながら、見ていくことにしよう。

もう暗くなっていた。寒々とした天気で、家々の正面をぼかしている濃い霧が、大気中で悪臭を発生していた。フレデリックはその大気をうっとり吸い込んだ。なぜなら、服の生地を通して、彼女の腕のかたちが感じられたからだ。それに、二つボタンのカモシカ皮の手袋に包まれた彼女の手、彼が接吻で覆ってしまいたいと思う彼女の小さな手が、彼の袖の上に寄り添っていた。舗道が滑るので、二人は少しよろめきながら歩いた。雲の中で、二人一緒に風に揺られているかのように彼には感じられた。

大通りに出ると、まばゆい光が彼を現実に戻した<sup>30</sup>。

この場面では、闇がフレデリックを幸福感で包み込み、そして光が彼を現実へと連れ戻していることを、ひとまず確認しておきたい。また、大気を吸い込む動作が描かれているということにも、注目しておこう。『感情教育』において、フローベールはしばしばフレデリックが匂いや空気を吸い込む動作を描いているが、それは常にフレデリックが期待に胸を膨らませる場面においてである<sup>31</sup>。ここはその一例だ。

この夕暮れの場面は、1842年11月末に位置している。それから、四年後、1846年から47年にかけての冬に、フレデリックがロザネットとパリの街を歩くとき、彼はこの夕暮れのことを思い出す。

---

<sup>30</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 133.

<sup>31</sup> この点については次の論文で検討したことがある。木内堯、「『感情教育』における感覚的体験」、『仏語仏文学研究』、第39号、2009年。

彼女が彼の腕にすがり、二人は並んで歩いた。ドレスの裾飾りが彼の足にあたった。そのとき、同じ歩道をアルヌー夫人がこのように彼と連れ立って歩いた、ある冬の夕暮れのことが、思い出された。この追憶に心奪われて、ロザネットの姿はもはや目に入らず、考えもしなかった<sup>32</sup>。

フレデリックを回想へと誘うのは、触覚の記憶である。ロザネットの「ドレスの裾飾り」が、アルヌー夫人との身体的接触を思い出させる。また、この二つの場面の類似は、二人の女性に対するフレデリックの態度の違いを浮き彫りにする。フレデリックは、アルヌー夫人といるときは、幸福感に浸りきっていたのに、ロザネットといるときは、そこにはいない女性のことを考えている。

つづいて、この夕暮れの記憶は、フレデリックがアルヌー夫人と街で会う約束を取り付けようとする際に、彼自身の口から喚起されることになる。1848年2月中旬、つまり二月革命前夜の出来事である。

そして彼は、ある冬の夕暮れ、霧のかかった日に、二人一緒に一度外出したことを彼女に思い出させた。それもすべてはるか遠い昔のことだ、今となっては！彼女のほうは何も心配することなく、彼のほうも下心を持たずに、この腕に寄り添って人前に出ることをいったい何が妨げているというのか、自分たちの周りには邪魔をする人がいるわけではないのだから<sup>33</sup>。

フレデリックは現在と過去の隔たりを嘆く。実際、「ある冬の夕暮れ」から、すでに五年以上の歳月が流れている。彼がアルヌー夫人にもう一度一緒に街を歩きたいと願い出るのは、この時間の隔たりを埋めようとしてのことではないか。アルヌー夫人はこの申し出を受け入れる。しかし、待ち合わせ場所には現れない。

夕暮れの記憶がこの次に言及されることになるのは、ダンブルーズ夫人がフレデリックに身を任せる場面においてである。1850年5月のことだ。

ダンブルーズ夫人は目を閉じた。彼は自らの勝利のたやすさに驚いた。ゆったりとそよいでいた庭の大きな木々が動きをやめた。静止した雲が空に長く赤い帯をひいていた。ありとあらゆるものが、動きを止めてしまったかのようにあ

---

<sup>32</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 249.

<sup>33</sup> *Ibid.*, p. 409.

った。そのとき、似たような夕べが、同じような沈黙と共に、彼の頭にぼんやりとよみがえった。あれはどこだったろう…<sup>34</sup>？

フレデリックがぼんやりと思い出す「似たような夕べ」のひとつが、彼がアルヌー夫人と一緒に外出した七年半前の「冬の夕暮れ」のことであることは、間違いないだろう。小説の筋書きでは、このときフレデリックがアルヌー夫人と共に外出した夕べを想起していることが、はっきりと記述されている。

ある晩、夕暮れ時に、〔…〕長椅子の上で、彼女は身を任せる。この夕暮れはフレデリックに、アルヌー夫人と腕を組んで外出した、似たような夕暮れのことを、<漠然と>想い出させる。しかし、この考えは蜃気楼のように通り過ぎる<消え去る><sup>35</sup>。

決定稿では、七年半前の夕暮れへの直接的な言及は削除されている。フレデリックはもはや、アルヌー夫人と共に外出した冬の夕暮れのことを、思い出すことができない。フレデリックのこの忘却は、時間の流れ、時間の隔たりを、否応なく感じさせる。

アルヌー夫人ともう一度街を歩きたいというフレデリックの願望は、1867年3月末に、二人が十数年振りに再会する場面において、ついに実現されることになる。この再会の場面で、街を散歩したいと願い出るのは、フレデリックではなく、アルヌー夫人のほうだ。

彼女は、彼の腕に寄り添って街路を少し散歩してみたいと言った。

二人は外に出た。

時折、店の薄明りが彼女の青白い横顔を照らした。するとまた、闇に包まれてしまうのだった。馬車と人込みと騒音の中を、二人は、自分たちのことしか意識せずに、何も聞かずに、歩いていった、田舎で枯れ葉の積み重なった上と一緒に歩いてゆく人々のように。

二人は過ぎ去った日々のことを語り合った〔…〕<sup>36</sup>。

フレデリックはこのとき、アルヌー夫人とかつて夕暮れ時のパリの街と一緒に歩いたことを、もはや記憶にはとどめていないだろう。しかし少なくとも

---

<sup>34</sup> *Ibid.*, p. 542.

<sup>35</sup> NAF 17611, f°53 (*L'Éducation sentimentale. Les Scénarios*, p. 302). なお、abcは削除、<abc>は加筆を示す。下線はフローベール自身の手による。

<sup>36</sup> *L'Éducation sentimentale*, p. 617.

も、アルヌー夫人は、そのことを覚えていると考えられる。彼女は、自ら街を散歩したいと申し出ることによって、かつて約束を破ってしまったことを償おうとしているのではないか。

いずれにしても、フレデリックとアルヌー夫人は、最も親密な思い出を、ここで再び体験している。かつての夕暮れの場面と同じように、この場面でも、闇は非現実感をつくりだす。この非現実感を表現するのに、かつての夕暮れの場面では「雲の中で、二人一緒に風に揺られているかのように」という上昇のイメージが比喩として使われていたが、ここでは「枯れ葉」という下降のイメージが用いられている。「枯れ葉」とは、過ぎ去った日々のメタファーであると考えられることもできるだろう。実際、二人は、夕闇の中を散歩しながら、過ぎ去った日々の出来事を語り合う。

ところが、このように闇が非現実感をつくりだすのと同様、光がフレデリックを現実へと連れ戻すという点においても、この場面は、過去を反復する。しかもその過去の反復は、きわめて残酷な形で行われる。散歩から戻ってきた後、ランプの光がフレデリックの目に現実を露わにするのだ。

帰ってくると、アルヌー夫人は帽子を脱いだ。小机の上に置かれたランプが、彼女の白い髪を照らした。胸の真ん中に一撃を食らったかのようにであった<sup>37</sup>。

この場面は、冬の夕暮れの場面の反復であると同時に、小説冒頭の出会いの場面の反復でもある。そのことは、「胸の真ん中に一撃を食らったかのようにであった」(Ce fut comme un heurt en pleine poitrine) という一文と小説冒頭の「それは幻のようであった」(Ce fut comme une apparition) という一文が、同一の構文におさまっていることから明らかだろう。

しかし、ここでの光の役割は、小説冒頭の出会いの場面とは、正反対のものである。光はもはやフレデリックを眩惑するのではなく、彼が抱いていた幻想を打ち砕く。この直後、フレデリックは目の前のアルヌー夫人の姿から目を背け、アルヌー夫人自身も光に背を向ける（「アルヌー夫人は、光に背を向けて、彼のほうへ身を屈めた<sup>38</sup>」）。光に眩惑されることで始まった恋は、光から目を背け、闇の中に逃れることによってしか、保ち得ないものである。

---

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 618-619.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 619.

## おわりに

本論では、『感情教育』において無意志的な記憶の想起がどのように描かれているのかを分析してきた。その結果、記憶の想起が主人公の恋愛感情に決定的な影響を及ぼしていることが、まずは明らかになったと思う。フレデリックは、アルヌー夫人への思いが冷めかけていたときに、光に照らされた彼女の姿を見て、あるいは赤い髪飾りをつけた彼女の姿を目にして、初めて出会った日のことや彼女の家に初めて招待された日のことを漠然と思い出し、甘美な喜びを味わっている。ボードレーが「香り」で用いている表現を借りるならば、フレデリックは「現在の中に取り戻された過去<sup>39</sup>」に陶醉しているのだと言えるだろう。

また、この小説では、記憶の想起だけでなく、記憶の喪失が描かれているということも、明らかにできたと思う。フレデリックはかつてアルヌー夫人と夕暮れのパリの街路を歩き、その散歩を幾度も懐かしんでいながら、小説の最後で再び彼女と街を歩くことになるときには、そのことをもはや忘れてしまっている。フレデリックのこの忘却に、共和制の理想に対する忘却とのアナロジーを読み取ることも可能だろう。フレデリックが夕暮れの記憶を喪失してゆく過程は、共和制の理想が無残に忘れ去られてゆく過程と、一致している。フレデリックの忘却は、彼の世代、彼の時代の、精神性を反映したものであるのだ。

---

<sup>39</sup> Charles Baudelaire, *Les Fleurs du mal*, dans *Œuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1975, p. 39.